

改訂の序

本書の初版出版からすでに7年が経過した。

この間、医学生をはじめとした多くの読者に好評を得て、また、英語版をiOS用アプリケーションとして販売開始することもでき、執筆陣を大いにはげますものとなっている。

医学、医療の進歩は著しく、さまざまな診断手技や治療方法が開発導入されてきた。そんな時代にありながらも、診断のゴールドスタンダードは変わることなく病理組織学的診断である。

疾患の原因には、ウイルスや細菌などの外因性のものや糖尿病などの個体の代謝機能を背景にしたもの、臓器の老化を背景にしたもの、あるいは、遺伝子の変化などいろいろなものがある。これらのものが細胞の機能に悪影響を及ぼし、最終的には形態異常をきたし疾患として認識されるようになる。

形態異常を観察し、疾患の原因や経過を説明するものが病理組織学的診断である。最近では、コンパニオン診断といって、免疫組織化学的な方法なども駆使して、単に形態だけでなく細胞の性格や機能の情報も把握して、さらに緻密な治療に結びつけることもできるようになってきている。医療のニーズが、病理医の業務を大きく増加させている状況である。

今回、本書発行のコンセプトである「正常組織をきちんと理解したうえで疾患を学んでいく」、「肉眼所見を大切にする」ことを大事にしながら、以下をポイントとして改訂作業を進めた。

1つは、近年の医師国家試験の出題傾向を参考に項目の追加・削除を行ったことで、もう1つは、読者の要望などを参考に各項目のブラッシュアップを行ったことである。

初版と疾患項目に違いがあるのは、上記のような事情のためである。また、同じ疾患でも写真の入れ替えなども行い、よりわかりやすいものとした。

肉眼所見は、画像で直感的に理解できるという点では、患者さんやご家族とのインフォームドコンセントのためのツールとしても活用いただけるのではないかと考えている。多くのみなさんにさまざまな場面で利用していただきたいと思う。

今回も、病理診断科のみでは入手できない画像を臨床各科の先生方に提供していただいた。あらためて感謝したい。

末尾ながら、本書が多くの方のお役にたつことを祈念して、改訂の序とさせていただきたい。

2015年3月

執筆者を代表して

下 正宗
長嶋洋治

初版の序

疾患の診断を行う際に病理組織学的診断はその要になるものである。特に、本邦の死因の第一位である悪性新生物、すなわち、がんの診断においては必須のものである。

この診断業務を行っている病理医はこれまで裏方の存在であった。しかし、病理診断科という標榜科として国民医療を支える一部門として認識されようとしてきている。また、必修化された医師臨床研修制度のなかでは、CPCレポートが必修項目となり、診療を行う医師のすべてが病理医の指導のもとで医師と成長する時間をもつことになった。

これまで、基礎医学と臨床医学の架け橋として病理学が語られてきたが、これからは臨床医学を支える病理学としての発展が期待される。病理診断学の発展である。

病理診断学の方法論で最も重要なことは病変の観察である。その中心は、肉眼的観察、組織学的観察である。病変により、電子顕微鏡的観察や免疫学的検査、染色体/遺伝子検査による細胞の解析が加わる。病理診断医のトレーニングは、肉眼的観察と組織学的観察を繰り返すことである。肉眼的観察には、臓器そのものを見ることだけでなく、さまざまな画像所見の把握も含まれる。病理診断学のことをよくわかっていない医学生などが、顕微鏡を見て診断するのか病理診断で組織さえ見れば診断がつけられると思っていることがしばしば見受けられる。しかし、どのような病変がどのような方法で採取され標本になったかは非常に重要な情報である。病理組織学的検査の申し込みの際には、なぜ病理組織学的診断が必要になったのか、きちんと画像所見も含めて詳細な臨床情報を提供する臨床医が増えることを願って本書は作成された。

羊土社から本書の企画が持ち込まれたとき、正常組織と病理組織との比較がメインの企画であったが、上記の思いから肉眼所見が豊富に加わったものとなった。実際の医療現場では、担当医は肉眼的に見えるものを病変として認識して、その組織学的診断な裏付けを病理診断医に

求めているはずである。本書に掲載された写真は、画像診断を行う際や病理組織検査申込書を記載する際に大いに役立つはずである。

医療現場でのカンファランスでは、さまざまな専門家がそれぞれの専門とする方法論で疾患を解析し正しい診断にたどり着き治療方法を検討していく。本書では病理診断学の立場から正常と考えられる組織像を提示した。正常組織との比較で病変を認識してもらえるように配慮した。病理組織学的診断のための材料はわれわれの手元にあったが、今回重視した肉眼所見用のさまざまな画像は関連した担当部署よりの提供を受けた。この場をお借りして感謝したい。

2008年1月

執筆者を代表して
下 正宗